



(NO FENCE IN NORTH KOREA)
NO FENCE

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」

会報 **かいほう ノーフェンス**

NO FENCE

やさしい気持ち、人の
痛みを感じる気持ち、
誰もが本来持っている
そういうものとわたし
たちは出会いたい。

vol. **5**

2009年8月

E-mail: nf-staff@netlive.ne.jp

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE : 00180-1-707147



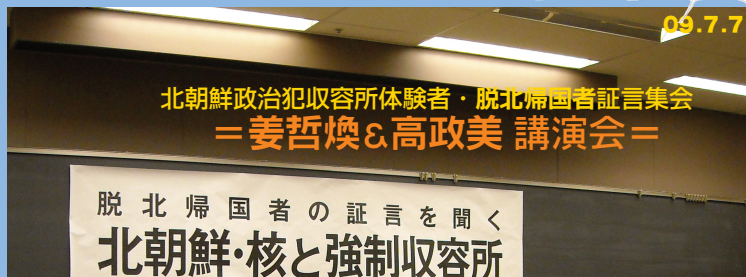
▶ INDEX ◀

- 総会報告 2
- 体験者証言集会 / 姜哲煥 3
- 体験者証言集会 / 高政美 7
- 特集** ● オバマ宛に書簡 (共同声明) 9
- オバマ宛書簡提出報告 / 宋允復 10
- メールで救える命がある (佐藤健) 12
- ナチの強制収容所との比較 / 小川晴久 13
- 姜哲煥の『平壤の水槽』を読む (下) / 小沼堅司...14

To the President of the United States of America,
Mr. Barack Obama, オバマ閣下へ

NO FENCE
(Association for the abolition of concentration camps in North Korea)
1-5-7-203 Hirakawacho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0093
Ph. +81(0)70-5459-9817 Fax: +81(0)3-3262-7473

特集



To the President of the United States of America,
Mr. Barack Obama,

We are 'NO FENCE', a group of Japanese citizens who are seriously concerned about human rights in North Korea, whose goal is the abolition of political prison camps in North Korea. We work in close cooperation with other grassroots human rights and humanitarian groups in Japan, the United States, Europe, and South Korea.

We welcome your decision to visit the former Nazi concentration camp at Buchenwald, and have read with great interest about your great uncle's role in liberating the victims of that terrible place.

We also respectfully note your commitment to human rights, including your resolve to close the Guantanamo Bay Detention Camp; and your commitment to nuclear disarmament.

As you visit Buchenwald, we would like to remind you that crimes that challenge the conscience of humanity are not merely a thing of the past. North Korea operates a number of large forced-labor camps in its mountain areas, in which an estimated 300,000 innocent prisoners are subject to abuse, torture, and even execution.

The nuclear development of North Korea is also closely related to the prison camps. Mr. Ahn Myong Chol, a former prison guard in North Korea, has testified that prisoners of all ages, none of whom returned alive, were mobilized to construct a large underground tunnel in Poongge-ri, in which nuclear testing was conducted.

The existence of these prison camps has been revealed clearly through the testimony of numerous defectors from North Korea and through satellite photographs. David Hawk has also prepared an in-depth report ("The Hidden Gulag") for the U.S. Committee for Human Rights in North Korea (<http://www.hnrik.org/laddeingulag/toc.html>).

We believe that we, the governments, leaders, and responsible citizens around the world, have a duty to speak out against these prison camps, and not focus merely on bargaining with a dictator with nuclear ambitions. If we fail to do so, we will be questioned by future generations on why we failed to apply the lessons of past crimes against humanity.

We earnestly hope that your visit to Buchenwald reflects a commitment to address the most pressing contemporary human rights crises as well, including an increased focus on human rights in your policy toward North Korea. Thank you very much for reading our letter.

Yours sincerely,

June 1 st, 2009



記念集会

第一回総会 & 強制収容所体験者 家族からの訴え

2009年

4月26日(日)

於: 星陵会館

幸い天気にも恵まれ、大きく開かれた窓からは、まるでテラスでコーヒーでもすすりたくなるような明るい日差しと緑が、会議室にも降り注がれていました。

慌ただし準備で参加者の数に不安がありましたが、ありがたいことにわざわざNO FENCEの総会という地味な会議に多くの方がご出席くださったことに、感謝の気持ちと励まされる思いがしました。

第一部は、総会。第二部は記念講演会「強制収容所体験者の家族からの訴え」と題し、日本人夫として帰国した弟の兄、芝田弘之さんと、ふたりの弟（一人は死亡）が帰国した兄の、金民柱さんから生々しいお話を聞きました。

(まとめ/小沢)

総会

1 08年度活動報告

初年度は準備年度として様々な基礎的作業をこなし、一方、国際会議開催、「クロッシング」上映会、鹿児島エリア支部活動で収容所生まれのシン・ドンヒョク氏の証言集会ほか、会報の発行等を行ってきた。

2、初年度の活動成果と課題

『畑には立った。クワ手に持つ人は少なし。』
～小さいながら礎は築いた。あとはひとつひとつ石積みがい～

3、08年度会計報告

実質、イベントの開催は、会費収入以外の篤志家たちの多額な寄付なしには実現し得なかった。会員の拡大が活動基盤につながり、活動の持続を可能にする。そういう意味では非常にまだまだ体力不足である。

4、09年度の活動目標

『目標は大きく。作業は地道に、しかし迅速に。』
<大活動目標>

- 国際刑事裁判所に提訴…
北朝鮮国家による国民への人道上の犯罪に対して、個人としての責任、国際的な責任の喚起を促していきたい。

<内部作業>

- 証言や統計等の科学的裏付けの把握とそのデータ化。
- 関係機関への提言等の要請活動。
- 国会議員他、社会的発言機会のある人材にも広報活動。
- 圧倒的人材不足。裾野を広く多様な作業スタッフの募集。



出席者からの挨拶と「ひとこと」発言

海を越えたその先に、最後に待っていたのは“強制収容所”



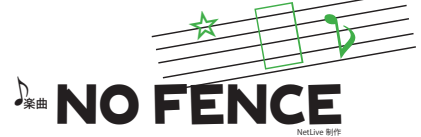
芝田弘之さん



金民柱さん

講演会は <http://www.netlive.ne.jp> で見るすることができます。

沖縄の著名な歌手、城間健市氏が、NO FENCE!を願い希望と勇気を熱い心で歌ったハードロック調の楽曲が披露されました。



楽曲 NO FENCE

(歌は英語の歌詞で歌われています。日本語はその訳。)

NO FENCE OVER THE MOUNTAIN
NO FENCE, WE ARE LOOKING FOR FREEDOM
NO FENCE, CATCH THE RAINBOW
NO FENCE, WE'RE ALL FREE

ノーフェンス、山(困難や障害)を越え
ノーフェンス、自由を求め
ノーフェンス、虹(夢)を掴もう
ノーフェンス、すべて解き放して

【楽曲『NO FENCE』(作詞・作曲、歌唱、城間健市)は、広く皆様に歌われることを歓迎します。】

【頒価:600円(郵送では、送料込みで700円)】

お申込はNO FENCEまで。

(撮影:菅原民生)



報告をする世話人の方々

脱北帰国者の証言を聞く
北朝鮮・核と強制収容所

“北朝鮮の核と強制収容所”と題して、7月7日、
＝姜哲煥&高政美講演会＝が「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」とNO FENCEの共催で明治大学リバティータワーにて開催されました。北朝鮮政治犯収容所の体験者であり、朝鮮日報記者でもある 姜 哲煥氏（著書：「北朝鮮地獄の強制収容所」「平壤の水槽」）が、現在朝鮮総連を訴えている日本在住脱北者の高政美さんと共に、北朝鮮を巡る様々な問題を人権改善と民主化の視点から語られました。

(文中の「守る会」は、正式名「北朝鮮の帰国者の生命人権を守る会」で、NOFENCEにも「守る会」の会員は多い。)

カン・チオルファン
姜 哲煥氏の講演

2009.7.7



**【諸問題解決には収容所解体と
帰国者問題が要】**

今、日本では拉致問題を契機に北朝鮮への関心は大変高いですが、はるかそれ以前の十数年前から「守る会」が、北朝鮮政治犯収容所解体と、帰国者問題に関して、大変意義深い仕事を続けておられました。韓国での運動の展開も日本の「守る会」がそのきっかけになっています。

この守る会が1994年から展開していた北朝鮮政治犯収容所を解体するということと、あと9万3000人に及ぶ北朝鮮への帰国者の問題、このふたつの問題がまさに朝鮮から派生する全ての問題を解決する上で、要になる核心部分であると考えています。

この北朝鮮の強制収容所が無くならない限り、核問題も、拉致問題も解決しないだろうと考えています。

北朝鮮は、金正日一人のために全国民が犠牲になる、奴隷になる、そういう奴隷制国家ですので、この体制を打破しない限り他の問題は解決できないと考えています。

【総連と帰国事業】

63年私の祖父母は共に総連京都の幹部であったので、一家全員で率先して北朝鮮に渡りました。

私は93,000人に及ぶ帰国者というのは、事実上、誘拐拉致されたものだと思います。何故ならば、虚偽の情報に基づいて、その煽動によって帰って行ったからです。

こうした、実態としては生き地獄であるところを、「地上の楽園」という虚偽の宣伝に仕立て上げて、北朝鮮はもとより日本の組織も、朝鮮総連、そして当時の日本の言論、報道も、ただそれを垂れ流しただけであって、ほんとうにその実態はいかがなものであるか

姜 哲煥【1968年平壤生まれ。北朝鮮の政治犯強制収容所に9才から19才までの間収容される。釈放後92年韓国へ亡命。2000年より韓国の有力紙『朝鮮日報』記者。韓国で北朝鮮の民主化運動、政治犯収容所廃絶運動を展開中】

という追求というものは殆どなされなかったように伺っています。

こうした9万人に及ぶ人たちのうちの約三分の一、三万人は収容所に連れて行かれて処刑されましたし、北朝鮮に渡って行った帰国者の家族の中で誰か親戚、親族が収容所に行かなかったという家は殆ど無いのです。

これだけのおびただしい犠牲がありながら、在日韓国朝鮮人社会でこれといった動きは全くありませんでした。ただ、90年半ばから「守る会」の活動のみが唯一こうした犠牲について追求し、声を上げた動きでありました。

私は、朝鮮総連の本部に祖父と祖母の写真を持って押しかけ、「何故私の祖父母をはじめ多くの人間が強制収容所に送り込まれたのか、その事情を釈明しろ」と朝鮮総連に求めたのですが、「そんな人間は知らない」といって私たちは追い出されました。

実は今週、総連の大阪の本部にも抗議のために行ったのです。いざ行ってみますと、総連本部の建物も売り飛ばされていて、実に怒りというよりは、むしろ哀れを催すような有様になっていました。

私は、もう体制の余命は長くない、といったことに照らして、朝鮮総連に残された機会は短い、もう最後の機会だと思います。その帰国者たちに対して、朝鮮総連はしっかり謝罪するか、その謝罪さえできないというのであれば、あなた方自身が北朝鮮に移り住むべきだと思います。

自ら血を分けた同族をそれだけの目を遭わせながら何ら手を打てないという組織は存在の意味がない、解体されるべき組織であるし、もしそのままやむやにやり過ぎて統一を迎えた暁には、北朝鮮に渡って行った10万人、そしてその子孫たちが膨大におりますので、彼らから相当な仕打ちを受けることになるだろうと思います。

【95年以降の北朝鮮の実情】

私はこの間度々日本にお招き頂いて強制収容所での体験については、つぶさにお話させていただきましたので、この場では割愛させていただきます。ただ、ご存じない方は、私を手記を書きまして日本でも出版していますので、それをお読み頂きたいと思います。

私が北朝鮮を逃れたのは1992年です。現在は朝鮮日報で北朝鮮問題専門記者として仕事をしておりますが、この北朝鮮収容所に生きていた私にしても、95

年以降の北朝鮮の実情について伝え聞いた時には、あまりの悲惨さに信じられなかったのが率直なところだ。私は95年以降に北朝鮮から逃れてきた人たちから聞かされた話は、「街で人が大量に餓死している。収容所でもない一般社会でも餓死が起きている。しかも拷問というのがあからさまに行われ、公開処刑も頻繁に行われている。中国から北朝鮮に送り返された人々たちが残忍な拷問を受けて処刑されている。」と。

【体制崩壊に必要なこと】

ひとつは、収容所の解体に焦点を合わさなければならない。全ての例えば北朝鮮に対する人道支援も、全てこの収容所の解体にリンクさせて与えるといった形で圧迫を加えなければならない。

もう一方は、中国の胡錦濤主席を説得して北朝鮮への脱北者の強制送還を止めさせなければならないということです。

今、北朝鮮は核実験を行い、ミサイルを発射してあらゆることをやって挑発していますが、これに対して国際社会は、国連を通じて制裁決議をして圧迫を加えています。私にはこうした形での圧迫を続けたところで、あまり役に立たないのではないかと思います。

なぜかと言うと、既に北朝鮮は自らの意図で、自国民を痛めつけ虐待し、自ら国家を封鎖しているそうした国家であるから、それにさらに外からそのような形の圧迫を加えてもたいした効き目はないと私には思えるのです。

私も先日38度線取材しました。38度線ですが、過去、この数年の間、ただのひとつも事件らしい事件は起きていないという。ところが中国の国境地帯では今、毎日のように銃声が響いていると聞きました。

北朝鮮、金正日政権は何を一番恐れているか、それはアメリカでも日本でもなく、北朝鮮内部の住民を一番恐れている。北朝鮮の住民が外部の情報に触れて、その考えかたが変わること、そして住民たちが逃げ出すこと、これは体制の崩壊に直結しますので金正日が一番恐れているのは体制の崩壊であって、従って住民の変化というものを一番恐れています。今、制裁としてマレーシアにある口座をいくつか封鎖をしたり、カンナム号という北朝鮮の船を追っかけ回したところでそれが果たして何になるか。

日本、韓国、アメリカが一致団結して中国に対して「脱北者の送還を止める！」と圧力をかける、それを実現さえすれば済むことです。

今、中朝国境で毎日のように銃声が鳴っているというそのことは、北朝鮮人民軍 30万を中国との国境に張り付けているのです。そして脱北者を狙撃してこれを殺す。そして脱北を試みる人たちから袖の下、ワイロを貰って見逃したり橋渡しをしているような軍人たちが摘発されて公開処刑されている。この銃声が毎日のように鳴り響いています。

韓国に入ってくる脱北者の数が毎月300人に昇っている。一方、中国から北朝鮮に強制送還される数は毎月、数千人の単位です。

今、北朝鮮は大変な経済難です。今、北朝鮮の人民に突きつけられている選択肢は、このまま餓死するか逃げるかの二者択一なのですが、そのような形で中国がどんどん捕まえて送り返すので、逃げ出す先もない

という状況です。

そのような一番肝心要の部分には関心を向けずに、金融制裁とか船舶の検査とかこのようなことをいくら繰り返したところで、北朝鮮はびくともしません。北朝鮮自身がそれを公言しています。

北朝鮮にラジオを送り込むことで、情報の注入を図る。韓国の方から風船を付けてラジオを北朝鮮に送り込む、或は中国国境地帯から北朝鮮内にラジオを流入させる。或は風船にインスタントラーメンをくっつけて送り込む、或はビラを付けて送る。こうしたことによる影響によって、北朝鮮というのはどんどん崩壊していくのです。

【体制を長らえさせた背景】

私は 92年に脱北しましたが、当時、韓国の情報機関は、高位脱北者、北朝鮮で高いポジションにいた脱北者の聞き取り調査を行いまして、アンケート調査を行いました。

「あと、北朝鮮の体制はあと何年持つか」ということを聞いたのですけれども、その時に、高位脱北者のおおよその意見は「あと十年だろう」という意見でしたし、97年に黄長燁(ファン・ジョンヨブ)さんが亡命されました。【黄長燁：北朝鮮亡命高官 元労働党書記】

その時に記者が質問して、「あの体制はあと何年持つのですか」、それに対してファン・ジョンヨブ氏は、「三年だ」と答えました。そのように、北朝鮮のエリートたちが目指するところ2000年には北朝鮮は崩壊するだろうと見ていたわけですが、それが実現しなかった。それはなぜかということです。なぜ、北朝鮮が長らえたかということ、それは韓国の金大中政権が北朝鮮に対して積極的に延命のための措置をとったからです。金大中氏は、自分自身ノーベル平和賞を取りたい、その他個人的な欲がありましたし、北朝鮮は金と食料に困っていた、この両者の利害関係が一致して取引をした訳です。

過去、金大中、盧武鉉(ノ・ムヒョン)政権が太陽政策を展開した両政権の10年間に北朝鮮にどれだけの支援が入ったか。現金だけでも80億ドル入りまし、食料支援は15億ドルです。で、民間の支援も合わせるとおよそ150億ドルが北朝鮮に注ぎ込まれました。

北朝鮮が麻薬密売等で稼ぐ額はいくらくらいかという、およそ年間で15億ドルから20億ドルです。それだけの外貨を注いで支えられたわけですから、減びたくても減べない、そういう状況だったのです。

97年に金大中政権が発足して北朝鮮と交渉が始まったわけですが、金正日は大変外貨に事欠いていて苦しんでおりましたが、最初に金大中に要求したことは何かというと、金ではなくて、まず韓国から北朝鮮に送り込むビラの送付、それを止めるという要求をしました。韓国では1985年から、国防部が北朝鮮の人民軍に向けて風船に付けてビラとかインスタントラーメン、歯ブラシ、歯磨き粉、或は肌着こうしたものまで送っていたのです。

当時、朝鮮人民軍は食べ物もまともになくて、そうした韓国から送り込まれてくるインスタントラーメンを煮て食べて腹を満たしておりましたし、その他ビラに送り込まれてくる情報によって殆ど溶解状態であったわけです。ですから、それほど金正日がそれに困っていたので、何よりも先にビラを送らないでくれというのを韓国側に要求したわけです。

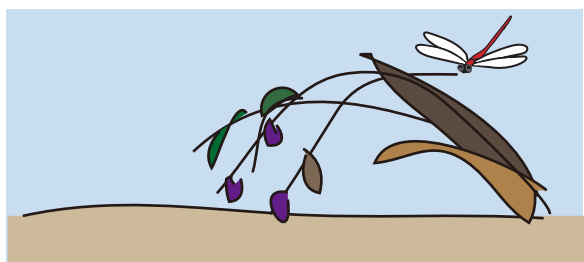
2000年の南北首脳会談に当たっても北朝鮮の金正日が要求してきた条件は何かと言うと、金はもとよりでありますけれど全ての北朝鮮に向けた心理戦の放送、これを一切全てストップすると、韓国政府はその条件も直ぐ飲みました。続いて2003年には、休戦ライン一帯に韓国側は大規模な大型の電光掲示板、大型スクリーンを設置して、人民軍兵士に向けたテレビ放送をやっていたのですが、それも「止める！」と金正日から要求されて、それも直ちに撤去しました。

北朝鮮の体制は全て金正日を支えるために組み立てられている体制であって、その中でも金正日が依存しているその支えとしているのが軍であります。その軍を金正日から引き離す、心理的にも引き離すという韓国側からの働きかけを一切ストップしたがために、金正日は安心して核、ミサイル開発の方に注力することができたのです。

この金大中という方、ノーベル平和賞を受賞して5年後、政権から退いたあとノーベル平和賞受賞5周年の記念の式で、「私の大統領在職時に、北朝鮮の人権は大幅に改善したんだ」というとんでもない嘘を話していました、その内容は何かと言うと、北朝鮮の人たちの食料支援をして、その食料が食べられるようになったので北朝鮮の人権は大幅に改善されたのだと。こういうとんでもないことを言っておりました。しかし振り返ってみますと、韓国を輸出立国として実現し得た朴正熙（パク・チョンヒ）の時代もそのように食料事情を大幅に改善されて、韓国民はメシが喰えるようになったわけです。ところが当時金大中氏はパク・チョンヒを名指しして、「独裁者である」とののっていました。その彼が金正日に対しては「独裁者」と名指しすることは一切しないまま、北朝鮮の人民にいくばくかの食料支援をしたので、人権が改善されたと平坦と語っております。

しかも在職中に、金大中氏は「金正日は見識のある指導者だ」と評価していました。あれだけの国民を餓死させて滅ぼした指導者を見識のある指導者だと持ち上げて、一方で韓国で正当な選挙のもとに500万票の得票差で政権の座についている李明博（イ・ミョンバク）大統領を独裁者だと名指ししています。

韓国社会の状況は私の目にはとてもまともなものに見えません。北朝鮮の住民が300万餓死するさなかにも、ただの一人も街頭に出てデモをしなかった。北朝鮮の住民が、野菜の屑切れも喰えずに餓死していたさなかには一切デモもしなかった人たちが、アメリカ産の牛肉は喰えないんだと言って道に溢れています。韓国のイ・ミョンバク政権に変わりまして、イ・ミョンバクが打ち出した北朝鮮政策は何かと言うと、『非



核3000』というスローガンを打ち出しています。

その中身は、「北朝鮮が人权状況を改善し、核を放棄すれば国民一人当たりの所得を3000ドル水準に引き上げるべく協力するのだ」と。ごくごくまっとうな北朝鮮政策をイ・ミョンバクが掲げているにも関わらず北朝鮮がそれに反発して、イ・ミョンバクに対して脅迫、恐喝の類いを働くのはもとよりでありますけれども、金大中をはじめとする韓国の勢力が、それは一切北朝鮮の立場を考慮しない“強圧政策”であると称して非難しております。

私は、韓国の真なる民主主義勢力が力を合わせてそうした韓国内の新北朝鮮勢力と対決しなければならないと思うのですが、これも大変困難が伴うものであって、日本やアメリカといった周辺民主主義国がしっかりそれを支えて、支援して欲しいと願っています。ただ、幸いなことに北朝鮮の人民の8割から9割がたが既に、金正日政権に対して信頼なんてものを失っております。金正日政権に対して大変憎悪を抱いております。

【今、権力層までが深刻な影響を受けている】

今、北朝鮮は大変危険な状況にあると私は見ています。北朝鮮は非常に危険な状況にあるゆえんは何かと言うと、90年代の大規模食糧難の時には犠牲になったのは力のない人たち、最下層の人たちでした。当ても権力層、権力の核心層に対しては配給制というのは維持されていて、それは主に海外から支援される支援物資が回されていたのですけれども、一般の住民にはそうした配給というのは閉ざされてしまって、餓死すべき人はどんどん餓死し生き延びた人たちというのは、それは個人で畑作をやったり、或は、そうしたよしもなければ盗みを働いたり或は自生的な市場で売り買いして生き延びるといふ、そういうノウハウを体得しえた人のみが生き延びることができたわけです。

北朝鮮は、今も大変危機状況ですけれども、それにも関わらず社会の下層、かつて大量餓死した階層の人たちは比較的安定しています。

具体的に言いますと、例えばファンフェドという南部、平野地帯なんですね。そこは北朝鮮の穀倉地帯であって、ひとつの郡、行政単位の郡あたりだいたい10万トンの米が獲れるところなんです。10万トンの米が獲れるとなると、人民軍の一師団がそこに居座っていて、「その米をよこせ」と言ってかすめ取っています。という状況であります。

従って、北朝鮮内部では権力層と一般人民の間でどちらが生き残るかという生存戦争が展開されていると言えます。今、人民軍は強盗と化して食料を強奪しておりますけれども、人民もただなすがままではなく闘う姿勢であります。

韓国も支援を止めました。日本も止めました。中国も金融危機の影響で北朝鮮に十分な支援をできないです。そうした状況の中で今、北朝鮮で起きていることは、軍を含めた権力層への配給が持続できなくなった。そういう危機の中で勿論社会の底辺の人たちの影響は起きていますけれども、それ以上に権力層が影響を受けている。

ですから、脱北者の問題、強制送還されないという状況さえ実現すれば、直ちに、もう瞬く間に北朝鮮の体制は崩壊するような状況になっています。

【体制瓦解には】

今、当面の大きな問題になっているのは、核問題です。仮に10年前に世界が力を合わせてこの人権問題で北朝鮮に対して強力に圧迫して締め上げていけばもしかしたら、この核開発は阻止出来ていたかも知れませんが、今既に北朝鮮の核は実践配備出来る間近の段階です。二回目の核実験をやりましたので、あと、3回目4回目と核実験をやれば、恐らく大陸弾道弾の弾道として搭載できるだけの完成度になるだろうと見込まれます。

この北朝鮮の核は絶対容認してはなりません。なぜならば核を握っている金正日という人間は、これは明らかに精神病的意識の持ち主であって極めて残忍な人間ですから、まかり間違えば韓国や日本にその核を使って、とんでもない災いをもたらす可能性が現にあるわけです。従って核は必ず除去しなければならないわけですが、その除去する方法に私は二つあると思います。

ひとつは直接北朝鮮の核のこの基地を限定爆撃する、攻撃するそういう方法がひとつあるでしょう。しかしそういう軍事的選択というのはどの国も望まないと思います。であるならば、二番目の方法として北朝鮮からの大量の脱北者を誘発させる、北朝鮮から人民が大量に逃げ出せるようにそういう状況を作り出せることと北朝鮮内に外部の情報を可能な限り流入させるというこのふたつによって北朝鮮の体制を瓦解させということです。体制が瓦解すれば核も使いようがありません。

今、国際社会では中国を参画させて北朝鮮を制裁しなければいけないと、なかなかその封鎖がうまくいかないという類いの話をしていますけれど、中国と北朝鮮の貿易といっても微々たるものでして、中国にとってはそれを封鎖しようがしまいが痛くも痒くもない程度のもにしか過ぎません。今韓国にとって中国は大きな貿易相手国であって、韓国から中国に輸出をストップするという事になれば韓国経済が大変打撃を受けるということになりますけれども、北朝鮮というのはあまりにもその経済規模が小さ過ぎて痛くも痒くもない。その程度の影響しかない。

今、国際社会が北朝鮮に対して加える圧力は、しっかりした大義名分のあることです。それはすなわち中国は自分自身が難民条約に加入していますけれど北朝鮮から逃れてくる人達を「難民」認定せずにとんどん北朝鮮に送り返しています。その国際法を無視して中国と北朝鮮の間の不法越境者送還に関する取り決めに基づいてとんどん送り返していかもその(国連)難民高等弁務官 (UNHCR) の脱北者に対するアクセスというのを遮断しています。

今、国際社会は、中国は本当は北朝鮮の側に立っているのではないかと、或は北朝鮮と中国と同盟関係というものを極めて過大評価する向きもあるように思います。しかし、私が見るところ北朝鮮が一番内心嫌っているのは中国であります。これはファン・ジャンヨブ先生から常々お伺いしている話ですが、それでも、「金正日はかつてアメリカに関してののしったことは聞いたことがない。しかし、中国に関しては盛んに悪口をいいのしっていた」と、これはファン・ジャンヨブ先生がおっしゃることです。

アメリカはかつて一度も北朝鮮に対して体制変革をしろということ突きつけたことありませんけれど、中国は鄧小平以降、一緒に改革開放をやろうじゃないかと、助けてあげるよということをおっしゃっていました。これは金正日からすれば、その体制を変えろということであって、これに対して金正日は大変ストレスを感じていまして、口さへ開けば中国の悪口を言っていたということです。

北朝鮮は表向き中国の改革開放について「これは社会主義を裏切ったものである。背いたものである」と批判しておりましたが、北朝鮮内のエリートの中では「いや、これは社会主義を裏切ったものではなく、むしろ資本主義の要素を取り入れることによって社会を発展させたのだ」と、そのような評価が広がっております。

しかし、中国から見れば社会主義を裏切ったのは北朝鮮であって、彼らは社会主義、共産主義流儀によれば、社会主義社会、共産主義社会というのは封建社会から資本主義社会を経てそれを乗り越えた進んだ社会であるのに父親が政権を握り、息子に譲り孫にもやらせると。もう、これは封建社会の逆戻りであって中国共産主義の方の目から見れば社会主義を裏切ったのはどっちだ、お前たちだろ?ということになります。

その社会主義のそもそもその理想というものも皆で平等にいい暮らしをしようということであって、皆で餓死しようということではなかったはずであります。したがって、勿論中国は北朝鮮の社会主義体制として残ることを願っておりますけれどもそれは金正日政権の存続を願っていることでは絶対なくて、むしろ金正日はエセ封建、宗教政治体制といったものでありますから、金正日体制の崩壊は中国も本心は願っているところだと思います。

しかし、中国は先日ウイグル問題が火を吹きましたけれど、ウイグル、チベット、台湾、香港とそういった地政学的な問題を一杯抱えていて、朝鮮半島で急激に韓国主導による統一なり、民主化なりが進めば、またそれが中国国内の民主化にも飛び火し得るという非常にリスクを抱えているので、それに対して大変心配しているようです。

そして、さらにはこの朝鮮半島全体で、アメリカの勢力が強まるということ、米軍基地が北上していることに対して大変心配しています。このふたつの要因があるが故に、今嫌々ながらも金正日体制を支えているという状況だと思います。

そこで、ファン・ジャンヨブ先生がおっしゃることは、中国がどうしても北朝鮮の体制の鍵を握っているので、ひとまずは急激な韓国より吸収、統一ということではなくて、中国式の改革開放を志向する政権を北朝鮮に立てるとそういう方向で中国を説得しようではないか、こういう戦略をかつて提示しておられました。

しかし、ひとまず金正日が除去さえすればいくら言葉だけは中国式改革開放といったところで、その実質は韓国による吸収統一にいくしかないのです。ですから韓国・日本・アメリカがしっかり協力して、中国に対して中国の国益を害さない形で金正日を除去するという、そのための話し合いを早く進めるべきだと思います。(講演は紙中の事情で一部省略されています。)

(通訳:宋ユンブク 小見出しは編集者が挿入。まとめ:MO)



コ・ジョンミ
高 政美さん 証言
(日本名は千葉優美子さん)

コ・ジョンミさんは、ひとことひとこと、言葉を噛みしめながら、嗚咽しそうな気持ちを精一杯こらえながら、辛い体験を語りました。そして、心から「北朝鮮にいる人々を助けて下さい!」と訴えました。



今も『助けて!』と、一日、待っている人々を助けてください!

皆 さんこんにちは。今紹介された高 政美(コ・ジョンミ)と申します。日本名では千葉優美子と申します。

きょう私は、おひさしぶりで皆様にお会い出来てうれしく思っています。未だに私は日本語がよく出来ないので通訳の方に助けて頂きながら、なんとか日本語でお話しようと思えます。

私は、数え年で4歳の時に母と養父たちと共に、北朝鮮に渡りました。私たち一家が生まれた国でない北朝鮮になぜ渡ったのかその理由について、私が大きくなってから母や父から何度も何度も聞きましたのでよく知っております。その当時、母は、父が死んでしまったので、本当に自分ひとりで子供を連れてどのように生活したらいいか、ものすごく悩んでいたそうです。そんな母に対して、朝鮮総連の人たちは何ヶ月も毎日のように母のところに来て、「北朝鮮は地上の楽園」であるとか「北朝鮮に行けば生活に困らない。自分のしたいことは自由に出来るし、こどもを育てるにも何の問題もない。」と一生懸命北朝鮮に行くように勧誘されたそうです。結果私たちは北朝鮮に行くようになって、1963年10月に北朝鮮に渡ったのです。

父母から聞いたのですが、北朝鮮に着いた時、その風景は人々がとても貧しくて、ここが北朝鮮だということ、地上の楽園であるというのは大嘘であるというのが誰の目にも直ぐ分かったそうです。そのため、一緒に行った私の兄は「日本に帰して欲しい」と訴えて、船から降りようとしなかったのです。すると兄はそのままだどこかに連れ去られて行きました。

このように当時16歳だった私の兄は、北朝鮮に着いたとたん引き離されたままになりました。それから5年後、やっと私の父があちこち手を尽くして、兄との面会が許可されました。私たちは北朝鮮では、精神病患者たちの病院を49号病院と呼んでいます。そこに入れていと聞いていました。面会に行く瞬間迄、私たちは健康だった兄ですが、どうして精神病院にいるか、その理由も北朝鮮に向かって聞くことも出来ずに、ただただ、精神病院にいるのだろうと考えながら、そこに行きました。なのに私たちが案内されたのは、山奥にある収容所でした。そこは白い塀に囲まれていました。そこに入ると二重の鉄格子が見えました。もう遠くから見ても、そっくりそれは間違いなく動

その中に何十人もの人たちが閉じ込められていました。本当に臭い匂いがして、その人たち、屋根がないので、雨が降っても、雪が降ってもそのままです。檻の中にいる人々は、ボロの服を着て、髪の毛は伸び放題でまるでライオンのようなようでした。頭は垂れ下がり、目はうつろで、何の感情もなく、とにかく人間に見える人は一人もいませんでした。当時 8歳だった私は、ただ恐ろしくて母の後ろに隠れていました。そんなところに、そんな人間たちがいる檻の中に、5年ぶりに会う私の兄がいました。私の兄は、ひどく変化していて、母、父でさえも兄だとは分からないほどとても貧しい姿をしていました。

結局私たちは、私の母がここを込めて一生懸命作ったお弁当も、一緒に食べることもできずに、その場を離れなければなりませんでした。

それから三年後、父のところに、『兄が死んだ』という指示書が来ました。ただ、「日本に帰して欲しい」と、ただひとこと言っただけだったのに、私の兄は悲惨な死に方をしなければなりませんでした。

本当に恐ろしい政治の犠牲になったのは、私の兄だけではありません。1976年3月のことですが、その70年代には、まわりに私たち帰国者、身内の帰国者たちの地獄の中でも、70年代にはあちこち一晩寝て起きたら突然いなくなったり、どこかに連れ去られていたり、本当に行方不明になる人がたくさんいました。

私たちは、私たち家族にも何が起こるか分からない、恐怖感の中に毎日あったのですが、結局私の父が76年の3月に突然いなくなりました。私の父は労働党に絶対入ろうとしなかったのです。それは、本当に日本にいる時、朝鮮総連の活動で朝鮮総連の帰国事業にも関わっていました。なのに自分自身が、北朝鮮に行ってみて、本当に始めて驚きながら、自分がしたこと、多くの人たちを説得して帰国させたこと、とってとって後悔しました。毎日夜に、深く深く反省していました。自分の息子もそんな悲惨な死に方をしたし、私の家族は一度も家族一緒に笑顔で過ごした覚えはありません。私の父は労働党に入ろうとしなかったのが、スパイだと罪になって当局の人間に捕まって恐ろしい拷問を受けました。幸いなことに私の父は5ヶ月のあとに家に戻ることが出来たのです。ところで、戻った父の姿はことばでは表現できないほどでした。

手足の指の骨が砕けていて、まともに立つこともできませんでした。身につけている物は、ただ肌着だけでクサイ臭い匂いもしたし、シラミとノミだらけで、「人はこんなに変わるのだな」と驚きばかりでした。

私が父をちょっと治療する何ヶ月かの間、17歳になった私ですけれども、人間の腐った肉を自分の手で治療したのは始めてでした。私の父はコンクリートで出来た一メートル四方の穴の中に閉じ込められて、何ヶ月もそこで大小便もたらいを使って、看守の前でその穴にしたそうです。ただ、その穴の中から出るのも拷問を受けるときだけ出されたそうです。拷問はことばにならないほどひどくて、そんな冷たい穴の中に何ヶ月も息もよくできないところにいた私の父が、家に戻って消毒薬を浸けたガーゼでお尻とかを消毒しようとしたら、腐った筋肉が解けてしまって、おしりの中にはこんな骨が見えて私が驚いて、そんな毎日でした。

本当に私の父はいつも言いました、「自分はなんでこんなにひどいことをしたんだ」

「自分自身も騙されて行った」と、「ほんとうにその時民団系の方々が、ものすごい一生懸命反対してくださったのに、なんで自分はその時ちょっとだけでも気付かなかったのだろう」と反省しながらの毎日のように本当に。もし死んだあとでも日本にいらっしゃる民団の人たちに会うことが出来れば、「あなたたちが100%正しかった」とお詫びしたいと、でも、自分が死ぬ時目をつぶることが出来るのは、今も日本に民団系の方々がいらしゃるので、もう残っている在日朝鮮人とか、私たちの3世4世代は確かに民団系の人々が正しい道を歩くように教えてあげるのだから、それを信じて目をつぶって死ぬことができるんじゃないかなという話をしていました。でも私が日本に戻って、満4年、今年7月28日になると四年になりますが、なかなか民団系の人々に会うことができませんでした。でもやっと、四年になって今週、韓国から民団系の人々に集まりを作ってください、夢のような場所で私の父のことを話して、父の代わりにお詫びを申し上げました。

これからは、ほんとうにここにいらっしゃる皆様、NO FENCE、守る会、会員たち、本当に皆と一緒に力を合わせて北朝鮮人権、帰国者を一刻も早く助けることができる私は信じております。本当に、この一週間は私にとって夢のような一週間です。なかなか守る会の皆様の前でも、父の本当のことを言うことが出来ませんでした。父が心から思っていた民団の人々が日本に来てみたらなんか冷たく見えたし、むしろ日本の人たちが気になって一生懸命私たちを助けて下さるし、それですごくおかしいんじゃないかなと。

北朝鮮に行って、何十年間も反省しながら民団系の人たちをそのように(思っていた)。でもそんな誤解とか本当に全部、今日からは私は本当に幸せな…これからもうちちょっと幸せに一日を過ごすのだと思います。

私は歴史的に、朝鮮総連が北朝鮮の支持通り本当に悪魔みたいなことをしたことをこの世の中に明らかにしなければなりません。それを今も日本に朝鮮総連団体がいます。その人たちが、私の後世代、子孫に至る迄、これからどんな悪魔のようなことをするか誰にも分かりません。そのためにも私たち経験者、保護者たちが本当にこれを命かけても明らかにして、私の後世代には二度と、こんな何十年間も地獄で過ごしたこと、二度とさせないようにしたかったのです。

皆様ご存知のように、私は去年守る会の皆様の応援頂きながら朝鮮総連の裁判を起しました。ほんとうにこの裁判を起こして一年になりますが、困難もあります。でも山田先生、大阪経済大学山田文明先生には、あちこち日本全国を回ってその科学的な資料になるデータを探しながら、今月21日に北朝鮮に残っている脱北した帰国者のため、日本人拉致被害者たちのため、裁判所で、朝鮮総連のこと歴史のこと明らかにする証言をしてくださいます。

本当に心より、感謝で感謝でたまりません。その日、私も最初に私の口から私の経験を証言するようになりました。でも、ただ30分ですので、30分で何十年間のこと、私の家族のひとつの例がこんなひどいのに、9万3000人のこと話したらとんでも時間が足りないのです。でも私はその裁判で勝つか負けるかそこには全然関係ないのです。ただ、日本にいる朝鮮総連団体は、どんな悪魔のことをしたかそれだけ明らかにして、後世代にこんなことが起こらないようにするのが私の目的です。これは間違いなく誘拐、拉致だということ私を私の口から証明しようと思っております。

明日、新潟に行きますが、やっと46年ぶりに、私3歳の時に行ったので46年ぶりに新潟に行きます。そこで話そうと思うのですが、正直、新潟で横田めぐみさんの日本人拉致が始まったたというのですが、そのことについてもいつか私の口から明らかにすると思っております。

ほんとうに皆さま力を合わせて、悪魔のこの(事実を)明らかにして、**今も『助けて!』と、一日待っている日本人拉致被害者、帰国者たち、日本人妻たち、いえ、北朝鮮国民たち、助けてください。**

このような場所を作ってくださいましたみなさまに、もう一回申し上げます。

ほんとうにこれからも応援をよろしくお願い致します。ありがとうございました。



オバマ大統領への手紙
送る

バラク・オバマ米合衆国大統領閣下 “北朝鮮に対し強制収容所の廃絶を求め 強力な人権外交を”

To the President of the United States of America Mr. Barack Obama,

We are "NO FENCE", a group of Japanese citizens who are seriously concerned about human rights in North Korea, whose goal is the abolition of political prison camps in North Korea. We work in close cooperation with other grassroots human rights and humanitarian groups in Japan, the United States, Europe, and South Korea.

We welcome your decision to visit the former Nazi concentration camp at Buchenwald, and have read with great interest about your great uncle's role in liberating the victims of that terrible place.

We also respectfully note your commitment to human rights, including your resolve to close the Guantanamo Bay Detention Camp; and your commitment to nuclear disarmament.

As you visit Buchenwald, we would like to remind you that crimes that challenge the conscience of humanity are not merely a thing of the past. North Korea operates a number of large forced-labor camps in its mountain areas, in which an estimated 300,000 innocent prisoners are subject to abuse, torture, and even execution.

The nuclear development of North Korea is also closely related to the prison camps. Mr. Ahn Myong-Chol, a former prison guard in North Korea, has testified that prisoners of all ages, none of whom returned alive, were mobilized to construct a large underground tunnel in Poonggye-ri, in which nuclear testing was conducted.

The existence of these prison camps has been revealed clearly through the testimony of numerous defectors from North Korea and through satellite photographs. David Hawk has also prepared an in-depth report ("The Hidden Gulag") for the U.S. Committee for Human Rights in North Korea (<http://www.hcnk.org/hidden/gulag.html>).

We believe that we, the governments, leaders, and responsible citizens around the world, have a duty to speak out against these prison camps, and not focus merely on bargaining with nuclear ambitions. If we fail to do so, we will be questioned by future generations on why we failed to prevent the victims of past crimes against humanity.

We earnestly hope that your visit to Buchenwald reflects a renewed focus on human rights crises as well, including an increased focus on North Korea. Thank you very much for reading our letter.

Yours sincerely,

Organizer;

NO FENCE

- OZAWA, Mokuri
Co-representative
- SUNAGAWA, Shojun
Co-representative
- SONG, Yoon-Bok
Secretary General

Supported by;

[Korea]

- Hwang Jang Yop, Chairman
Peter Jung, Executive Director
Committee for the Democratization of North Korea
- Kim Tae Jim, Representative
NK Gulag Democracy Network at the U.S.
- Ahn Myong Chol, Representative
NK FREEDOM
- Benjamin H. Yoon, Representative
Citizens' Alliance for North Korea
- Han Ki Hong, President
NKnet Network for North Korea
- Sang Hun Kim, Representative
Peter Jung, Executive Director
Justice for North Korea
- Seong Min Kim, Executive Director
Free North Korea F
- Tae Keung Ha, Executive Director
Open Radio for North Korea
- Do, Hee Yoon, F
Citizen's coalition
- Choi Sung Yong, Representative
Family Assembly of North Korean abductees
- Moon Kook-han
the North Korean Human Rights International
- Park Sang-hak, Representative
Fighters for Free North Korea

- <代表要請団体>
NO FENCE
共同代表 事務局長 砂川昌順 小沢木理 宋允復
- 日本
北朝鮮による拉致被害者家族連絡会 代表 飯塚繁雄
北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会 会長代行 西岡力
特定失踪者問題調査会 代表 荒木和博
RENK(救え!北朝鮮民衆/緊急行動ネットワーク) 代表 加藤博
北朝鮮難民救済基金 理事長 加藤博
北朝鮮難民の生命と人権を守る会 代表 三浦小太郎
- 韓国
北韓民主化委員会 委員長 黄長燁 副委員長 姜哲煥
北韓民主化運動本部 代表 金泰振
北韓人権市民連合 代表 安明哲
自由北韓放送 代表 金聖政 尹玄
開かれた北韓放送 代表 金聖政 尹玄
北韓民主化ネットワーク 代表 河泰慶
北韓正義連帯 代表 金尚憲 韓基弘
被拉致・脱北者家族会 代表 崔成龍 事務総長 Peter JUNG
自由北韓運動連帯 代表 都希命
北韓人権国際連帯 代表 朴尚宇
国際外交安保フォーラム 理事長 金順成
The Refugee P.Nan Lee Ho Taek Michael Nettrour
- 北米・欧州
Human Rights Watch
Ann Buwald, Esq. Executive Director
Jubilee Campaign
Suzanne Scholte, Chairman
North Korea Freedom Coalition
Nam Sin-U, Moon Kuk-Han
International Coalition to Save North Korean Slaves
Rev. Phillip J Buch
North Korea Refugee Service Mission (NKRSM)
Steve Kim, President
318 Partners Mission Foundation
Kyung B. Lee, President
The Council for Human Rights in North Korea, Canada
Dr. Norbert Vollertsen, Germany
Song, Eun-Sil New Spring Church, Germany
Masako Ikegami, Professor
Center for Pacific Asia Studies (CPAS), Stockholm University, Sweden

(Photo/Zack Seckler)

アメリカ合衆国 大統領
バラク・オバマ 様

私たちは"NO FENCE"という北朝鮮の人権問題をたいへん憂慮している日本の市民団体が、北朝鮮の政治犯収容所の廃絶を目指しています。日米欧韓の市民人権団体、人道主義グループと密接に連携をとって活動しています。

私たちは、閣下がブッヘンワルトのナチスの強制収容所跡を訪問されることを決められたことに感謝し、また、この悲惨な場所の犠牲者の解放にあたって、閣下の大叔父様がご尽力されたことを知り、関心を持っており、また、閣下が、グアンタナモ収容所の閉鎖を決定され、また核兵器廃絶を表明されるなど、人権に深く関心を持っておられることに敬意を表します。ブッヘンワルトを訪問されるにあたって、人間の良心をとがめるような罪は、過去のものではないことを今一度思い出していただきたいのです。北朝鮮は山間部で数多くの大きな強制労働収容所を運営し、30万人とも思われる罪のない人たちが、虐待、拷問、処刑を受けています。北朝鮮の核開発は、収容所と深く関わりがあります。

北朝鮮の元収容所警備兵であった安明哲氏は、核実験が行われたプンゲリの大きな地下トンネルの工事に、すべての年齢の収容者が動員され、一人も生きて帰ってこなかった、と証言しています。

このような収容所の存在は、多くの脱北者の証言や衛星写真から明らかになっています。デービッド・ホーク氏はアメリカ北朝鮮人権委員会の詳細な調査報告("隠された収容所")を作成しています。私たちは、世界の政府、指導者、責任のある市民に、核の野望を持つ独裁者と駆け引きすること終始せず、これらの収容所に反対していく責務があると確信しています。そうでなければ、後世の人々に、なぜ過去の人類に対する罪の教訓を生かすことができなかつたのかと問われることでしょう。

私たちは、閣下のブッヘンワルトへの訪問が、対北朝鮮政策において人権に力を注ぎ、今まさに起こっている最も差し迫った人道犯罪への対処に反映されることを心から願っています。最後までお目通しいただきありがとうございます。

敬具 2009年6月1日

- orean Slaves
- (NKRSM)
- rch, Germany
- dies (CPAS), Stockholm University, Sweden
- ve
- alities of Victims Kidnapped by North Korea (AFVKN)
- ng Chairman
- for the Rescue of Japanese Kidnapped by North Korea(NARKN)
- representative
- mission on Missing Japanese Probably Related to N. Korea(COMJAN)
- ecutive Director
- : North Korean Refugees
- wa, Representative
- scue The North Korean People ! Urgent Action Network
- ura, Representative
- ity to Help Returnees to North Korea (HRNK)

to OBAMA

北朝鮮に対し強制収容所の廃絶のために 強力な人権外交の展開を求める

ソン・ユンボク
報告: 宋允復

-37筆の賛同と共に- オバマ宛に書簡送る

「オバマ大統領が六月にブーヘンバルトのナチス収容所跡を訪問する」
日本でNO FENCE会員以外にこの「ブーヘンバルト」というドイツの地名に聞き覚えのある人はそれほど多くはないかも知れません。

1939年英国政府発行の白書『The White Paper On The Treatment Of German Nations In Germany』—これはナチの残虐性を告発したのですが、その舞台がまさにブーヘンバルトの強制労働収容所でした。

この白書を昨年10月入手し、そこに描写されている収容所での虐待の数々と北朝鮮のそれとの類似に驚いた小川晴久副代表が、同白書の意義を強調し会員の協力で急遽翻訳、当会ホームページに掲載し、冊子も用意しました。こうした経緯で同地の名が記憶に刻まれていたので、先の報道に反応して、「この機会にアピールせねば」と思い至ったのです。

◎「打てば響く」世界の同志たち

日本、韓国、欧米の団体に賛同を呼び掛けましたが、次から次へと熱い賛意が寄せられました。特に韓国からは「打てば響く」という感の反応が続々寄せられました。欧米圏に関しては私の英語が拙いこともあり、在米コリアン建築家の南信祐(ナム・シヌ)先生に仲介をお願いしたのですが、スザン・ショルティ(ディフェンスフォーラムファウンデーション)、フォラツェンといった方々はもとより、ジュビリー・キャンペーンのブルダ代表などこれまでコンタクトのなかった方々からも積極的な協力の申し出が寄せられました。

ヒューマンライツウォッチ(HRW)では日本ディレクターの土井香苗さん、韓国のケイ・セオクさんからニューヨークの本部に積極的にプッシュしていただきましたが、本部のアジア担当部門は前向きだったものの、法務部が難色を示した。理由は主に「ナチスの収容所と北朝鮮のそれとは性質が違うのではないか」、従として「HRWは核問題には関わらない」と。

人道犯罪の分類として民族抹殺(ジェノサイド)と奴隷化は別区分されていて、ナチスは前者、北朝鮮は後者であり、

【解説】 オバマ大統領が2009年6月4日にドイツのブーヘンバルトを訪問すると知りました。

そこでNO FENCEでは、急遽それに合わせてオバマ大統領に『北朝鮮に対し強制収容所の廃絶を求め、強力な人権外交を』という趣旨のメッセージを送ることにしました。

このメッセージの趣旨に対して、国内外の人権問題で活動する団体や個人の方々から計37の賛同を頂きました。

提出にあたっては、さらに本文の精査を経て前頁の9頁にある英文(赤い字は和訳)を駐日米国大使館を通じて提出しました。以下は、この発案と対外交渉など中心になって活動した、NO FENCE事務局長の宋允復氏の報告です。

安易に同一視しているのではないかと懸念したようです。NO FENCEでは、アウシュビッツを中心とする絶滅収容所に対して、ブーヘンバルトは強制労働収容所の性格が強く、これは北朝鮮の政治犯収容所と近いと判断し、まとめた文案でしたが、HRW本部法務部はそこまで読み取るうとはせず、ひとまず今回は見送りという結論でした。ただ「日本からこういう協力要請が来るなんて珍しい。日本でもこういうことをしている人たちがいるのだな」と歓迎され、「今後は文案をまとめる段階から相談できればスムーズに協力できる」ということでした。

ところがここから土井香苗さんが粘ったようです。多忙な中、英語版の文案を調整しつつ本部を説得して賛同を取り付けてくれました。

WORLD PHOTO CLUB

◎ さらに主要国の国会議員に

NGOへの賛同呼びかけの後、主要国の国会議員にもこのレターを送りました。

「在宅ロビー活動」を唱導する加藤健さんのご協力で、オバマ宛レターと共に、北朝鮮の人権蹂躪に言及した嘆願メールをイギリス、アイルランド、フランス、オランダ、カナダ、アメリカ、オーストラリアの議員および欧州議会議員の計3000ヶ所以上に送りました。

アイルランド外相とオーストラリア外務省、豪自由党副代表で「影の外務大臣」であるJulie Bishop議員からの返答をいただきました。

加藤さんは兵頭二十八さんとの共著『予言 日支宗教戦争』(並木書房)の第七章で「在宅ロビー活動」のノウハウを公開しています。いずれ勉強会を開催したいと思います。(12頁の「メールで救える命がある」で加藤さんの発想、ノウハウの一端をご覧ください)

◎ 諸氏の協力

英文への翻訳から公式文書としての書式、署名の用意、ホームページへの掲載まで、さらにデザイン、PDF化、細かい修正・校正、外国特派員協会へのポスティング、文案の検討から処理のフローまで、砂川、小沢両代表、小川副代表、小沼、菅原、並河の世話人の皆様には多大な負担をお掛けしました。

また、日本の団体各位におかれましても、ご多忙のところ調整を経て賛同をお寄せいただきありがとうございます

た。荒木和博、西岡力、増元照明、飯塚繁雄、加藤博、李英和、三浦小太郎の各位、さらに東京ブルーリボンの会、声よ届け波濤の彼方に!の皆様に謝意を表します。

6月1日には駐日米国大使館あてに「オバマ宛レター」を送付。

6月4日には韓国でも北韓民主化委員会(委員長 黄長燁)の手で駐韓米国大使館に伝達されました。

http://cdnk.co.kr/bbs/board_view.php?bbs_code=bsldx40&bbs_number=1116

メディアではラジオ・フリー・アジア、ボイス・オブ・アメリカ、デイリーNK、ジャパントゥタイムズ、イタリアのAsiaNews.it等で取り上げられましたが、国内メディアは反応なし。某テレビ局からは「何か絵(映像)があると取り上げやすいのですが」という話がありました。記者会見なり、大使館への手渡しなりの場面を提供すべきでした。

足下から

今回の呼び掛けの過程で、改めて日韓米欧の志を共有する人々の熱い思いに触れ決意を新たにしました。これをきっかけに国際的連携も密にしたい考えです。

それにつけても、日本国内の基盤を固めるのが先決です。

このレターを準備する間、5月25日には北朝鮮が核実験を実施しました。在日朝鮮人の多くは気づくと思いますが、この5月25日は朝鮮総連の結成記念日です。ここにメッセージを読み取ることは可能でしょう。

7月4日の米独立記念日にも中距離ミサイルを複数発射しました。

金正日は「2012年には強盛大国の大門を開ける、統一の扉を開く」と言っている。これは核で韓国を脅し上げいずれ併呑するという意志の表明です。

これを邪魔させないためにアメリカをミサイルでけん制し、「関係改善」、在韓米軍の撤退を欲しているのです。その韓国併呑が一段落すれば、今度は日本を恐喝して金を巻き上げに掛かる。

北朝鮮の背後でその命脈を握る中国は、金正日のそうした意図を抑止するつもりはさらさらない。むしろ北朝鮮を最大限活用し、北朝鮮主導で統一された朝鮮半島を中国の覇権下に組み入れ、台湾を併呑した後は、日本をも支配下に収め、東アジアでの覇権を確立したいと考えている——これが私の見立てです。

東アジアにおける自由民主主義国(日本、韓国)と全体主義国家、専制独裁国家との死活を掛けた戦いがすでに始まっているのです。

忸怩たるものがあります。北朝鮮を養い、ミサイル、核開発を助長してきた日本と韓国。それが明らかな形をとった危機機として現前しているのに、いまだに北朝鮮と国交正常化して戦前の償いをすべきだという。

すなわち、金正日政権に日本国の血税を注ぎ込んでその延命に手を貸し、核・ミサイル開発を助長することが朝鮮人民への償いになる、日本国の国益に適うなどという倒錯した主張の持ち主が政界にも言論界にもまたまだいるのです。

衆議院選挙も近い。国政に携わる、携わらんとする人たちの一人でも多くに、あの体制の本質をしかと把握していただかなければなりません。NO FENCEとしても取り組みを展開していきます。

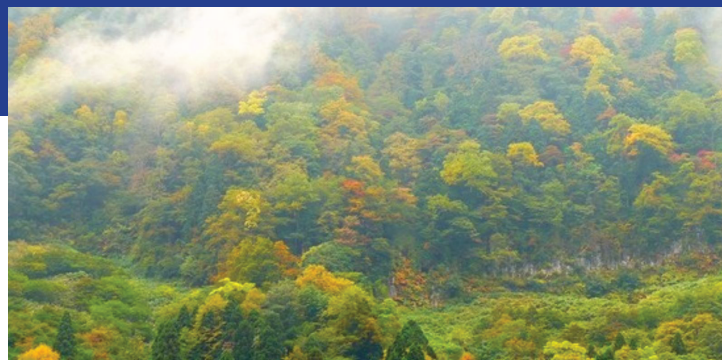


みなさまの支えなしには、活動の維持はなし得ません。閉じ込められ、日々ののちの危険と隣り合わせの人々を救うために、みなさまのご理解とご協力を今後ともよろしくお願い致します。



だが、姜哲煥をして、
<人間として>生き延びる
ことを可能にしたものは
なんであったか。のちに
彼は、耀徳の自然を懐かし
み、生きる強さを与えてくれたと回想している。

「私は飢えた囚人で、ボロキレに身を包んでいたが、草花の香り漂わせる春風や、燃えるような緑で森が



光り輝く夏、そして山の
彼方にある夕陽に照ら
された茜色の空を愛し
た。

野生の朝鮮人参の採集
を命じられ山の奥深く入った時、泰然自若とした山の
雄姿に思わず畏怖した。」
どんなに辛いときでも、それに耐える力を与えてくれ
たのは、こうした自然の純粹さと貴重な友情であった。

16頁の続き

「武道通信かわら版」

■「メールで救える命がある」 加藤 健

◎中国の人権弾圧を訴えてやれ! あなたも欧米議員を動かせる!

もしあなたが、居酒屋で下記のように話している私を見かけたらどう思うでしょうか?

「このまえ中国の人権侵害をイギリスのマイケル・ムーア議員に訴えたらさあ、すぐに外務大臣に質問してくれてさあ、ホントに仕事が早いよマイケルは……」

ちなみに私は英語を大して話せない、なんの権力も持たないフツーの日本人オヤジです

恐らく「酒を飲んでイカれたか? それともサギ師か?」とお思いになると思います。それも当然です。日本の国会議員を動かすことさえ難しいのに、イギリスの国会議員に質問など頼める訳ないと考えるのが普通です。ましてやイギリスから何千キロも離れた中国の人権問題です。「英語も口々に話せないのにどうやって訴えたというのだ? いい加減にしろ!」とお怒りになる方もいるかも知れない。

ところがこれは全て事実です。2月はじめに中国の反体制派弁護士の高智晟(Gao Zhisheng)氏が当局に拉致された事件をムーア議員にメールしたのですが、調査担当秘書のスチーブソン氏から英国外務大臣に質問した旨の連絡をいただきました。

ムーア議員には昨年中国のカトリック司教逮捕を訴えたときも、下記のように質問してもらいました。

<http://www.theyworkforyou.com/wrans/?id=2008-10-21c.225064.h>

また昨年4月に産経新聞が北京の反体制派弁護士、倪玉蘭(Ni Yulan)女史の逮捕をスクープしたとき、記事を翻訳して送ったら1週間後に質問してくれました。

<http://www.theyworkforyou.com/wrans/?id=2008-04-29d.200912.h>

私のパソコンには欧米議員のメールアドレスが数千件入っていますが、ここに年がら年中、中国や北朝鮮の非道を訴えるメールを送っています。また航空便の手紙も過去何千通も送っています。それによって議会質問、質問趣意書提出、抗議文送付に結びついたことは数え切れないほどあります。英語が苦手なフツーのオジさんでもこんなことが出来るのです。

「インターネットは世界を変えた」とよく言いますが、ロビー活動を劇的に変えたことは間違いありません。個人が、部屋の中から、全世界をいきなり相手にできるようになったのです。組織に入る必要もなければ金もかからない。年齢も学歴も職歴も関係ない。病気で家から出られなくても大丈夫。英検2級程度の英語力でも、コピーアンドペーストで十分説得力ある文章が作れます。誰でも出来るのです。

ソフトに欧米の議員のメールアドレス(ネットで公開されている)を登録しておけば、クリック一つで何千通、何万通もの訴えを瞬時に送ることができます。そして中国

や北朝鮮の人権弾圧情報を繰り返し送っていけば、やがて政策に反映され、日本を守ることにつながるのです。

現在EUは人権弾圧を理由に中国への武器輸出を禁輸していますが、これを解除しようという動きがあります。中国の人権弾圧は世界で最も大規模なものであり、共産党独裁政権が続く限り決して無くなりません。下記が中国の真実です。

<http://www.faluninfo.net/gallery/12/>

ところが人権弾圧情報の供給が減れば、武器産業のロビイストたちは「中国はマトモな国に生まれ変わった」と主張して禁輸解除を働きかけます。それによってハイテク兵器が中国に渡れば、アジアのミリタリーバランスは大きく崩れます。中国の人権弾圧を訴えていかなければ日本が危ないのです。

「メールで救える命がある」という事実もあります。

下記のように、中国共産党は外部から妨害が入らなければどこまでも残虐になります(注意:ショッキングな画像)

<http://www.faluninfo.net/gallery/13/?page=8>

<http://www.tchrd.org/press/2008/pr20080318c.html>

ところが欧米で大問題になると、「国家転覆扇動罪」「スパイ罪」などで確定判決が出ている人でさえ「病気療養」名目で釈放・国外追放されます。1通のメールが欧米の議会を動かし、人の命を救うことがあるのです。

不法な占領に抗議するチベットや東トルキスタンの人々、信仰故に迫害される地下キリスト教徒や法輪功学習者、また中国や北朝鮮を民主主義、人権、法の支配といった価値観を共有できるマトモな国に変えようと命懸けで活動する人々を助けることは、大変やり甲斐のある仕事です。というより道義を重んじる日本人として、無辜の人が虐げられるのを黙って見ている訳にはいかないと思うのです。

拉致問題も同じ手法で訴えることができます。拉致問題は日本人の命に関わる問題であり、最も重要度が高いものです。私はこれまで各国の議員に訴え、EU全体の大臣に相当する欧州委員会委員から力強い返答を得るなどしています。大勢でやれば大きな成果が上がることは間違いありません。

この「在宅ロビー活動」のノウハウについて、兵頭二十八先生の近著『予言 日支宗教戦争』(並木書房)の第7章で具体的に説明させていただきました。読んでいただければすぐに始められます。ご興味ある方はぜひご覧ください。

『予言 日支宗教戦争』は保守論客の中で実力ナンバーワンといわれる兵頭二十八先生が、宗教と近代的倫理の観点から書かれた画期的な文明論です。

思うに読書の醍醐味とは、良書に出会ってパッと視野が広がり、これまで見えなかったことがクッキリ見えてくる、あの感動の瞬間ではないでしょうか?

兵頭先生の知性が凝縮したこの一冊が、そんな「真実の瞬間」をもたらすことは間違いありません。

ご注文はネットから簡単にできます。いますぐどうぞ!

<http://namiki-shobo.co.jp/military/index.cgi>

【北朝鮮強制収容所の基礎知識】 <4>

ナチの強制収容所との比較

小川 晴久

「労働力の搾取は、労働が最も高い生産性に達するよう、可能性の限界まで推し進められなければならない。」

昨

年8月、1939年に英国政府が発表したナチ収容所白書の存在に気づき、ブーヘンバルトを中心にした強制労働型収容所という形態の収容所が、アウシュヴィッツに象徴される絶滅収容所と別に存在したことを知った。後者は1941年以降に作られたもので、1933年1月ヒトラー政権の誕生以来、45年の崩壊まで12年余という短い期間であったが、ナチの強制収容所には前後して2種類の収容所が存在したことを知ったのである。ブーヘンバルト型は強制労働収容所で、北朝鮮の山の中の強制収容所はこちらに属することが分かった。最近フランクルの『夜と霧』を5年前に再読したときのメモ（レジメ）を読む機会があった。フランクルはアウシュヴィッツ（絶滅収容所）を経験しているが、まもなく他の者たちとダッハウ（強制労働収容所）に移される。彼が指摘した収容所の本質は、強制労働収容所型のそれであることが、今回読み直して初めて分かった。北朝鮮収容所にぴったり当てはまるのも至極当然である。この発見は小さくない。北朝鮮の強制収容所がブーヘンバルト型であることが分かった今、フランクルの『夜と霧』もそっくり北朝鮮の強制収容所の本質を示すものであると位置づけなおし、北朝鮮強制収容所理解に活用していく必要がある。今回はこのことを示したい。

労働を通じての抹殺

北朝鮮の強制収容所は完全統制区域と革命化区域の差はあるものの、共通しているのは働かせて殺していく所である。前者は入ったら二度と出てこれない所で、政治犯本人が収容される所。後者は金づるがあればひょっとして出る可能性のある所で、政治犯と血のつながりのある家族全員が収容される所である。現在は後者はヨドックだけで、ヨドックを含め他の6カ所はすべて完全統制区域であるといわれる。両者に仕事の内容の違いはあるが、本質は労働力を最高度に搾り出して、殺していく方式である。芝健介氏の名著『ホロコーストナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』（中公新書、2008年刊）の168-9頁を見ると、強制収容所の労働管理はヒトラーの親衛隊が行っていたこと、1942年3月にO・ポール親衛隊大將がポール指令と呼ばれる指令を出していたことが分かる。

宣伝相ゲッペルスは同年9月に「労働を通じての抹殺こそは、最も優れた、最も生産的な方法である」と法務大臣に提言したという。ポール指令とゲッペルス提言こそは、ソ連のグラウグ（強制収容所）にも当てはまるであろうが、北朝鮮の強制収容所に最もよく当てはまる。

驚愕、無感動、退行—収容所生活の三段階

フランクルはウィーン生まれの精神医学者であったが、ユダヤ人であったため、両親、妻、二人の子と共にアウシュヴィッツに送られ、彼以外はガス室で殺されるか餓死した。彼が生き延びることができたのは、彼だけがダッハウ収容所に移ることができたからである。数年間の強制収容型収容所の体験で彼は収容所に適応していく段階を大略三つに捉えた。最初は驚愕（巨大なショック）、続いて無感動な段階。苦悩する者、病む者、死につつある者、死者、これらは当たり前前の眺めとなる。無感覚、無関心、無感動、これこそただ生存を維持することに必要な心の自己防衛であった。しかし、最後に最も恐ろしい人間の退行が始まる。最も原始的な要求充足（食べることほか）の欠如が、心理生活のより原始的段階に移行する。あらゆる精神問題、あらゆる高次な関心が減退する。中国労働改造所体験者ハリー・ウーの体験記『ビターウィンズ』（NHK 出版）を読んだとき、高校教師たちが食欲しか関心を示さない人間に堕ちて行ったというくだりを読み、ショックを受けたが、まさしくこれである。中国の労働改造所はその名の通り、労働によって人間をよい方向に改造するところとうたっているが、人間を動物に堕しめていく残忍なところである（最近裁判で収容者を決めろという要求が全人代で出ているというがその早い実現を望みたい）。北朝鮮の強制収容所は刑期がないだけにもっと残酷である。フランクルは言う。いつ釈放されるかまったくわからない、これは目的（将来）に向かって生きることができないことを意味し、内部崩壊が始まると。裁判もなく、刑期が全く示されないという北朝鮮の強制収容所の残酷さは『夜と霧』で赤裸々に描かれている。名著である。ぜひ一読を！
<『夜と霧』（新版1500円、旧版1800円）みすず書房>



共産主義全体主義と強制収容所 (その4)

カン・ Cholファン
姜哲煥

ピョンヤン
— 『平壤の水槽』

北朝鮮 地獄の強制収容所』
を読む(下) —

オヌマケンジ
小沼堅司

公開処刑、妊婦への残忍な仕打ち

自己批判—相互批判と思想再教育は無意味な儀式であったが、公開処刑は身の毛もよだつような残酷な儀式であった。姜哲煥も16歳になってこの恐ろしい儀式に参加させられた。彼が見た最初の処刑は、脱走を試みた囚人であった。収容所長が刑を宣告された男の罪状を読み上げた。「党はこの犯罪人を寛大にも許し、耀徳(ヨドック)で更生のチャンスまで与えた。にもかかわらず被告人は党の信頼を裏切る重大な罪を犯した。よって死刑を執行する。」もはや人間とは思われないほど痩せ、傷ついた囚人は口に石をいっぱい詰め込まれ、3本のロープで支柱に目、胸、腰のあたりを縛りつけられていた。指揮官の「祖国の反逆者を撃て」という命令で警備兵が一斉射撃を3回繰り返す。3度目に最後のロープが引き裂かれて、前に掘ってある穴に落ちる。「そこが彼の墓である。これが囚人の葬儀だといわんばかりの惨い仕打ちだった。」

だがこれが最悪の光景ではなかった。85年10月、エリート部隊の軍人であった二人の囚人が処刑された。銃殺ではなく絞首刑であった。発狂した獣のようにのた打ち回って死んだ。それは見るからに恐ろしい光景だった。公開処刑に集められた2-3千人の囚人は、ぶら下がっている死体に向かって石を投げつけるよう命令された。その際、「人民の裏切り者は出て行け!」と叫ばなければならない。そのあと人間の輪郭を失った死体は一晩中吊るされ、翌朝鳥に食われるままにされた。党と「人民」による〈鳥葬〉というわけである。姜哲煥はこう述懐する—「20世紀も終わろうとするこの時期に、なぜこれほどまでに残酷なことが起き得るのだろうか。そもそも、銃殺刑を絞首刑に変更したのは誰の考えだったのか。絞首台での断末魔の苦しみは恐ろしいほど長く感じられた。そして、野蛮きわまる石投げの儀式。一連の儀式は予想を遥かに超える恐怖を収容者たちに植え付け、脱走を考える気力さえ失わせる。」10年に及ぶ耀徳での収容所生活で姜哲煥は、公開処刑に15回立ち会うことになる。

このように収容所生活には残酷な仕打ちがたくさんある。中でも、「愛を犯した罪」という章で語られている仕打ちは、戦慄を禁じえないものである。耀徳収容所では、囚人同士の性的関係は禁じられていた。発覚すると男は独監房にぶち込まれ、生還できるか危ぶまれるが、女は地区の全村民の前でセックスの一部始終を物語らなければならなかった。監督官と群集の「破廉恥な覗き趣味」を満たすためであった。妊婦で性関係が発覚した場合、妊婦は木に縛りつけられ、鞭で打たれたり、乳房を切り取られたりすることもあった。鍬の柄を局部に押し込まれたまま死亡した妊婦もいたという。まさに「邪悪を通り越した狂気の世界」であった。また、妊娠した女性に対する手荒な墮胎手術もおこなわれた。麻酔も外科器具もない中世の拷問のような手術であった。性的関係とその結果をこれほど厳しく罰するのは、「反革命の血統」を絶つためであった。

これら残酷な仕打ちは、「政治的宗教」あるいは「世俗的宗教」(R・アロン『知識人の阿片』)としての共産主義の非人間的な所業といわなければならない。共産主義全体主義独裁制においては、あらゆる行動は党とその偉大な指導者の教示と命令、あるいは慈愛と恩徳によって判断・処断されるが、その体制を支えるひとつの柱が「政治的宗教」としてのイデオロギーとそれによるプロパガンダ教育(革命歌や革命映画、金日成の新年辞の暗誦大会など)と自己批判—相互批判の思想教育であるとすれば、もう1つの柱がこのような公開処刑などのテロル(恐怖政治とその機構・テクノロジー)である。

人間洞察

姜哲煥のこの収容所記録文学には、貴重な人間洞察が随所にちりばめられている。たとえば飢え。「飢えは人を獣に回帰させる。大学教授、労働者、農夫、そして私自身。全ての人に別け隔てなく甦る悪夢のような本能だ。飢えが人を獣にする瞬間を、私は耀徳で無数に見てきた。」囚人はネズミを見つけると躊躇なく貪り食う。



しかし一時的に空腹から解き放たれると羞恥心に苛まれ、ひどい無力感に襲われる。「その苦悩は人が人であることに欠かせない尊厳の証かもしれないが、それも長続きしない。再び飢えに襲われると……。」「人が獣と区別されるのは良心があるからだと信じていたが、それは必ずしも真実を伝えていないことを私は耀徳で知った。」

また、たとえば憎悪。姜哲煥が収容所生活で叩き込まれた教訓は、人間は限りなく残虐になる存在であり、人の尊厳は収容所では跡形もなく消え去るということであった。あるとき、密告者の死体をかれの作業班が埋葬しなければならなくなった。なぜ、こんな人間の屑を自分たちが山まで運び、埋葬しなければならないのか腹立たしかったが、姜哲煥ら5人の子どもは穴を掘り、足で死体を踏みつけて放り込んだ。「私たちは、屍を辱めるのになんの躊躇もなかったばかりか、このときばかりは愉快でたまらなかった。それがいかに残酷なことか、誰にも分からなかった。男は汚らしい犬のような振る舞いを続けた拳句に、獣に相応しい埋葬で報われた。ただそれだけのことである。」

あるいは復讐。日本から帰国したある総連幹部の男は、1974年、55歳のときに逮捕され、家族と切り離されて収容所に入れられ、その後15年間を一人だけの力で生き抜いた。彼の収容所生活を支えていたのはただ1つ、復讐だった。釈放されたとき、妻は再婚していたばかりか、子どもは父親を「人民の敵」として見下した。彼は自分を陥れた警察幹部を殺し、そして自殺した。復讐のためにのみ生き延び、その目的を達すると自ら命を絶ったのである。



釈放、金と暴力の支配する社会へ

収容所の悪夢は唐突に終わった。1987年2月16日の金正日の誕生日の恩赦で釈放された。金正日の誕生日を祝う式典も無意味な儀式であった。だが無意味ではあっても、共産主義全体主義を支えるのに不可欠な儀式ではあったろう。それは、偉大な指導者を不断に〈現前化〉させるための「スペクタクル(見世物)政治」に必要な〈装置〉なのである。式典は、収容所長の「偉大な首領様と親愛なる指導者同志の慈愛に満ちた行い」についての演説のあと、「金日成将軍の歌」の合唱、釈放される囚人代表の感謝の辞と続く。「偉大なる指導者金正日同志の恩恵により、私たちの罪は許され自由までお与えくださいました。私たちは心のそこから党に感謝し、この決定に応えるため力の限りを尽くします……。」

残る囚人代表の送辞も美辞麗句で溢れる。「党は私たちにより鍛錬する機会を与えてくださいました。ここにいる全ての者を代表して感謝の気持ちを表明し、釈放の恩恵を頂けるよう一層の努力を重ねることを約束したいと思います。」これらの言葉は、G・オーウェル『1984年』(20世紀最大の政治小説といわれる)が描いた全体主義独裁制国家オセアニアの「偉大な兄弟(Big Brother)」とその党のスローガン、「自由は屈従である／無知は力である／戦争は平和である」を思わせる。

9歳で耀徳に入れられた姜哲煥は19歳の青年になっていた。耀徳の近くの村の集団農場に一時的に配属され、その後工場地区周辺の小さな町へ移った。その年11月末に、父が死んだ。その父は帰国して26年、うち収容所で10年。芸術家への夢を諦め、妻と離婚させられ、すべての希望を奪われたが、常に平穏に見えた。その死も平穏だった。89年6月には祖母も死んだ。共産主義という「宗教」に夢を膨らませ、周りの反対を押しつけて「地上の楽園」に渡ったが、家族を地獄の国の強制収容所へ道連れにしたことを悔いた。その自責の念もあって口数も少なくなっていた。その夏、天涯孤独となった姜哲煥は、平城の叔父に妹ともども引き取られた。90年1月に移動許可証を手に入れ、平壤にいる母と再会した。

収容所の外にでて新たに、あるいは改めて北朝鮮社会の現実を知ることになる。職場や近所の住民の中に、収容所と同じくらい密告者が潜んでいること、北朝鮮では農民の子は農民になることを義務付けられていること、都市居住者と結婚して農民階級から脱出する途は88年の法律で禁止されたことなどである。とりわけ、この社会を生きてゆく潤滑油は金であるという事実である。「北朝鮮では法と秩序に代わって金と暴力が支配している。」資本主義という言葉をきくとヒステリックに反発する社会で、もっとも尊ばれているのが現金である。特に日本からの帰国者がこの社会で身を守る防御策は金しかないという。金と日本製の物品を賄賂として役人に渡せばなんでも解決がつく。錆び付いて動かない政治官僚制という機械も、ちょっとした賄賂という油をさせば稼動する社会だ。道から道への移動許可証も切符も、平壤に住むことさえ可能になる。共産主義社会におけるマモン(金銭)崇拜の支配はすさまじい。

暴力もいたるところではびこっていた。「法は遥かに遠く、拳骨はすぐ近くにある」社会。北朝鮮は哀れみの片鱗すらない冷酷な世界であるという事実。誰もが脅し、また脅されていた。叩きのめし、叩きのめされていた。この暴力の世界にいつか姜哲煥も巻き込まれていった。

そうこうするうち、姜哲煥は、郡の奉仕管理所で山間地住民に必需品を供給する仕事に就くことになった。石油がないため牛車で運んだ。才覚と努力、それに地区の党書記への付け届けで貴重な物資を買い付け一儲けした。党の配給システムは慢性的な麻痺状態で、脱法行為であっても補助的な供給ルートが必要不可欠であった。たとえば1年分のガソリンを、軍の管理者からセイコウセイコーの時計一個で調達するという類である。闇の流通ルートで一獲千金を狙うことができたが、その代わり配給票は紙くず同然となった。90年代に入って市場は目に見える形で崩壊していった。

姜哲煥は、90年代後半に大量の餓死者を出し、現在でも続いている慢性的な飢饉の原因の一端は流通の不全にあるという。

貨物輸送が途絶え、未舗装の道路を旧式のポンコツトラックで運ぶ破目になったが、都市に必要な農産物は途中で腐り、地方に必要な工業製品は輸送されなくなるという悪循環に陥った。食糧事情がさらに悪化すると、農民は、集団農場を見向きもせず、犬や山羊の飼育に精を出した。無能で腐敗した官僚の元で働く集団農場では仕事をした振りをして、夜、山の斜面の樹木を切り倒して畑を開墾するために、一心不乱に働いた。結果は、表土流出と土砂堆積、壊滅的な洪水被害である。

脱北、中国への逃避行

その後、姜哲煥は、多少金のかかる賄賂を使って妹とともに平城市の叔父の家に同居する許可を得ることができた。また地区の社会安全部部长(警察)に賄賂を渡して母の住む平壤への移動許可を取得することもできた。生命線となる日本からの物資も月一度の割合で送られてきたし金もあったので、賄賂社会を泳ぐことができた。しかし、1991年、思いもよらない友人の密告によって、韓国のラジオ放送を「違法に」聴いたことが発覚して、国家保衛部の監視が強まってきたとき、脱北を決意した。

彼は、韓国のラジオによって、韓国の歌だけでなく、北朝鮮の政治経済を分析した内容、北朝鮮からの亡命者のインタビュー、世界各地のニュースを概観する番組、とりわけルーマニア大統領チャウシエスキの処刑などを知った。そして韓国KBS放送のキリスト教番組を聴き、「同胞への愛と尊敬を伝えるメッセージ」に心が震えた。北朝鮮では国営ラジオ、テレビ、新聞、そして教師までもが憎しみの言葉に満ちていた。帝国主義者、階級の敵、裏切り者、敵……敵に警戒せよ、敵を倒せ、というように。人びとは真実の言葉に飢えていた。韓国の放送を聴くことによって、「欺瞞の網の目」から少しずつ解放されるように思えた。姜哲煥は書いている——「金日成とその息子、金正日親子に支配された独裁体制に対する批判を明確にすることができた。汚職、弾圧、収容所、食糧不足、国民の労働意欲を剥奪する社会、親子の偶像崇拜、そして、その誕生日式典で披露される吐き気を催すほどの無駄遣いなど、この体制が抱える様々な矛盾について私たちが気づき、それを証明できる十分な経験も積んできたが、それを一つにまとめ上げる視点に欠けていた。ラジオ番組はそれらを見事に結びつけ、矛盾の原因を説明してくれていたのである。」

韓国ラジオ放送を聴いているという密告による国家保衛部の調査は、隣の郡に住んでいた友人の安赫(アンヒョク)にまで及んだ。二人は、発覚そして逮捕か、逃亡かの選択を迫られた。列車で恵山(ヘサン)の手前まで行き、恵山から鴨緑江(オウリョクコウ)を越えて中国へ脱北した。対岸の長白県(チョウハクケン)から延吉(ヨンギル)へ、北京、大連へというその後の逃避行についてはここでは省略しよう。

1992年9月14日、ついにホンジュラス船籍の貨物

船で密航、公海上で韓国の船に引渡され、待望の韓国亡命に成功した。

韓国ラジオ放送を聴いているという密告による国家保衛部の調査は、隣の郡に住んでいた友人の安赫(アンヒョク)にまで及んだ。二人は、発覚そして逮捕か、逃亡かの選択を迫られた。列車で恵山(ヘサン)の手前まで行き、恵山から鴨緑江(オウリョクコウ)を越えて中国へ脱北した。対岸の長白県(チョウハクケン)から延吉(えんきつ)へ、北京、大連へというその後の逃避行についてはここでは省略しよう。

1992年9月14日、ついにホンジュラス船籍の貨物船で密航、公海上で韓国の船に引渡され、待望の韓国亡命に成功した。そこは自由の国だった。各人の生き方を決めていたのは画一的な思想ではなく様々な考え方であったが、同時に他人のことも考え、他人と価値観を共有していた。到着して1ヶ月後、記者会見が開かれた。自由な国の自由なジャーナリストは、姜哲煥と安赫の証言の自発性、真実性に疑いの目を向けた。かつてG・オーウェルが指摘したように、自由社会にどっぷり浸かって快適な安全地帯にいる知識人やジャーナリストは政治的想像力が枯渇し、共産主義全体主義独裁政治のおぞましさに思いが及ばないのであろう。もう一つ、姜哲煥がいうように、真実を話せば北朝鮮の金日成・金正日体制の非人間性を曝け出し、韓国を有利にするという〈政治算術〉が働いていたのであろう。政治宣伝の記者会見だといいたいのだ。何百万人の人びとが餓死や圧政に苦しみ、国民全体が自由を奪われているのに、彼らの唯一の関心は証言の信憑性なのだ。姜哲煥は昂然と訴えた。「もしあなたが私たちを信じないなら、北朝鮮に行けばいい。あなたは、私たちが命を賭けてここに來たのに、嘘をついていると考えているのか。」



耀徳を生き抜く

収容所内で姜哲煥は、たえず「死の強迫観念」に苦しめられた。いつも死ぬ夢を見たという。他の囚人が殺されるのを目撃する夢、倒木に押し倒される夢、金鉱での陥没や爆破の際の事故の夢、絞首刑にされた囚人に石を投げる夢。そのすべてが、「夢と現実の世界の交錯する恐ろしい悪夢」であった。死の強迫観念は悪夢の中だけにかぎらず、日中にも現れ、生きる望みを断ち切ろうとしたという。「今生きている地獄より、死を選ぶほうが楽に思えたことさえある。」その彼が耀徳を生き抜くことができたのは、逆説的にも絶え間なく強制される労働のせいであった。生きているすべての時間がなんらかの作業に費やされ、常に罰を恐れ、命令に服従すること以外考えることなどしなかったからであるという。

だ
可
⇒11頁に続く。 (間として)生き延びることを
可
であったか。のちに彼は、耀